看護学生の就職先選択の条件に関する文献検討：新卒看護師の就業継続への支援への一考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-04-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 矢島, 直樹
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/237

［その他］

看護学生の就職先選択の条件に関する文献検討
―新卒看護師の就業継続支援への一考察―

矢島　直樹

Ⅰ．はじめに

2021年に実施された第110看護師国家試験では約6万人の合格者が出ており、新たに看護師免許を取得した者の多くが看護師として、臨床の場に入っている。一方で看護師の離職率は17～18％程度で推移しており、特に新卒看護師の離職率は7.5％程度で推移していたが、2019年度には8.6％に上昇した[1)]。

新卒看護師の離職については多くの研究がされており、専門的知識・技術の不足から来る無力感や自己効力感・自尊感情の低下、周囲の人間関係の困難さ、交代勤務や多忙な業務による疲弊、患者の生死に向かうことへの精神的負担が新卒看護師の離職への意向を高めることが報告されている[2-6)]。こういった影響による新卒看護師の離職防止のため、臨床では職場への適応を促すような教育体制づくりや支援への取り組みが報告されている。これらの取り組みについて看護学生は就職説明会やインターンシップで直接職員から話を聞くほか、近年ではSNSなどを通じて様々な情報を手に入れて就職活動を行っており、自分の希望や設定した条件と照らし合わせて就職先を選択できる環境になってきていると考えられる。

しかし新卒看護師の離職率に大きな変化はなく、これは看護学生が施設側の発信している情報を適切に活用できず、就職先を選択する際の条件と就職した施設の実際との間にミスマッチが起きているためではないかと考える。そのため、看護学生が何を重視して就職先を選択しているか明らかにしていくことで、施設は看護学生の求める情報を発信でき就職後に認識のずれによる早期離職を避けることにつながるほか、就業を継続して実践を積み重ねた看護師が増えることは施設での看護の質を担保することにつながると考えられる。

以上より、本研究では看護学生の就職先の選択に焦点をあてて近年の文献を検討し、就職先選択の条件や選択に影響を与えたこととして挙げているものを整理して、看護学生の就職先選択を決定づけているものを明らかにしていく。またその結果を踏まえ、新卒看護師の就業継続の支援と離職率低減に向けた取り組みについて検討していく基礎資料としたいと考えた。

受付日　2021.10.18
受理日　2021.12.23
所　属　看護福祉学部

Ⅱ．研究方法

本研究では医学中央雑誌Web版（Ver.５）を用い、検索対象は近年の研究の動向を把握するため2015年から2020年の期間に発表された原著論文とし、「看護学生」と「就職」をキーワードとした（検索式：(看護学生/TH or 看護学生/AL）and（雇用/TH or 就職/AL)）and (DT=2015:2020 PT=原著論文))。検索された103件から看護学生の就職に関連した内容を含まない研究と対象に看護学生と看護師以外（助産師、医療福祉関連職種）を含んだ研究を除いた49件のうち、看護学生の就職先の選択や決定に関する内容を含む20件を分析対象とした。抽出された文献を表１に示す。

これらの文献を精読し、看護学生の就職先選択に関する内容を「就職先選択の条件」と「就職先選択に影響を与えたこと」に分け、その知見を整理した。

表１　看護学生の就職先の選択に関する文献

文献No.	著者	発行年	タイトル	ソース
1	遠藤芳子　他	2020	岩手県内に就業している看護職者の地元に就職した理由の調査 －看護学生を地元就業につなげるために－	北日本看護学会誌、23巻1号、1-8
2	田中博子　他	2020	看護学生の就職先選択の現状とキャリアガイダンス実施における課題	帝京科学大学紀要、16巻、53-59
3	上山和子　他	2020	看護大学生の看護専門職への動機づけ強化に与える影響要因 学部4年生の進路選択の調査から	インターナショナルNursing Care Research、 19巻2号、133-139
4	山口大輔　他	2020	男子看護学生のキャリアコミットメントと就職先選定に対する考え	日本看護学会論文集:看護管理、50号、147-150
5	渡邉光代　他	2020	A大学における看護学生の就職の選択基準に関する調査	目白大学健康科学研究、13号、10-115
6	竹本由香里　他	2019	東北地方にあるA大学看護学生の職業的アイデンティティと 地元志向	北日本看護学会誌、22巻1号、21-29
7	播磨弘子　他	2019	看護学生が就職後に希望するワーク・ライフ・バランスに関する 意識調査	看護・保健科学研究誌、19巻1号、40-49
8	松井聡子　他	2019	実習施設を就職先として意識するきっかけとなった看護師の 魅力的な態度	福岡県立大学看護学研究紀要、16巻、35-43
9	小薬祐子　他	2018	看護学生の就職先決定の傾向と特徴 －初年度卒業生の就職先決定に着目して－	帝京科学大学紀要、14巻、245-250
10	田邉要補　他	2018	看護学生の職場選択と精神科病院に対する就労意識	高崎健康福祉大学紀要、17号、27-43
11	中村仁志　他	2017	看護師の実習指導が就職先選択に与える影響	山口県立大学学術情報、10号、29-37
12	西村和子　他	2017	新卒看護師の訪問看護ステーションへの就職を阻む要因	日本看護学会論文集:在宅看護、47号、39-42
13	村上正和　他	2016	道北地域の中規模病院に看護学生が就職選択を決定する要因 －臨地実習評価との関連性から－	名寄市立病院医誌、24巻1号、24-28
14	本多和子　他	2016	看護学生における就職活動の傾向 －将来の希望別の就職先選定基準－	了徳寺大学研究紀要、10号、241-247
15	村松十和　他	2016	看護学生の就職先選択要因及び就職前に直面する不安	豊橋創造大学紀要、20号、25-33
16	長沼希久代　他	2016	看護学生の訪問看護への就職希望に関連する要因の検討	北海道公衆衛生学雑誌、29巻2号、151-158
17	出口睦雄　他	2015	愛知きわみ看護短期大学卒業生の就職病院選択動機	愛知きわみ看護短期大学紀要、11巻、23-32
18	本多和子　他	2015	看護学生が就職活動時のインターンシップで得た情報 －就職先選定に有用だと考えた情報－	横浜創英大学研究論集、2巻、10-18
19	山田美由紀　他	2015	臨地実習体験が看護学生の就職先決定に及ぼす影響	日本看護学会論文賞:看護管理、45号、414-417
20	山本江里子	2015	看護短大における就職支援について考える	神奈川歯科大学短期大学部紀要、2号、85-89

Ⅲ．結果

１．研究対象

抽出された文献の対象の分類を表２に示す。

最も多かったものは「卒業予定者」で、最終学年であることのほかに、就職先が決定していることやインターンシップを経験していることに焦点を当てていた。「実習後の学生」では専門領域実習だけでなく、１・２年生で実施する基礎実習も含め、実習が就職先の選択に与える影響について見ていた。「在学生」は卒業予定者以外の学年を含んでいるものを分類した。「その他」ではすでに就職している卒業生や、卒業生と４年生を対象とした研究、特定地域に就業している看護職者を対象として研究されていた。

表２　文献の研究対象者の分類

	件数	詳細
卒業予定者	10	就職決定者、養成課程の最終学年
在学生	6	1年生、男子看護学生、各学年の病院実習を終了した1～4年生　など
その他	4	卒業生、看護職者　など
計	20	

２．研究の内容

１）就職先の選択の条件

看護学生の就職先の選択についての内容が含まれている文献は14件で、文献と研究方法・対象、文献中に示された主な就職先を選択した条件や理由を表３に示す。

文献中で述べられている就職先選択の条件･重視したことを分類し､それぞれについて述べる。

（１）就職先施設の地域

就職先選択の条件に､就職先の地域に関する記述がある文献は11件であった（文献１～３､５、７、８、10、13、15、17、19)。

看護学生は自宅からの近さや地元であることなど、自分の住み慣れた地域で働くことを希望していた。地域への愛着から地域へ貢献したいという意思を持ち、就職先を選択していた。一方で看護学生は就職先の立地や利便性も選択の条件としており、就職後の自分の生活環境から就職先を選択していた。

（２）経済的理由

看護学生の就職先の選択条件に、経済的理由を挙げている文献は11件であった（文献１、３～５、７、８、10、13、15、17、19)。

就職先の給与が自分の希望と合致するかを重視しており、給与が安い場合は就職したくない

条件となっていた。また経済的理由から地元への就職を選択したとの文献もあった。

この他に奨学金の貸与を選択の条件としている文献も見られた。

（3）教育体制

就職先の教育体制が選択の条件として挙がっている文献は10件であった（文献２、３、７～10、13～15、17）。

教育制度については特に新人教育についての記述が多く、就職後に自分たちがどのような教育・研修を受けられるかを重視していた。

表３　就職先選択の条件・重視したこと

文献No.	著者	研究方法・対象	就職先選択の条件・重視したこと
1	遠藤　他	郵送法による自由記述式質問紙調査 対象：岩手県内に就業している20歳代の看護職者	得られた自由記述内容をコード化し分析したところ、岩手県内に就職した理由は【家族や重要他者の存在】【地元への愛着と貢献】【働いてみようという職場】【県内在住希望】【経済的状況】のカテゴリーが抽出された。
2	田中　他	インタビューガイドを用いた半構造的面接 対象：卒業予定の女子学生	・【就職先選択の要件】のカテゴリーは「自宅に近い距離であるか」「実習で養われた自分の興味のある領域・分野を重視する」「社会的に認知されているか」のサブカテゴリーから構成された。 ・【比較しながら就職先の絞り込み】のカテゴリーは「興味ある領域・分野で選ぶ」「インターンシップによる印象」「人間関係は良いか」「教育体制は整っているか」「福利厚生は整っているか」「病院は新しくてきれいか」「モデルとなる看護師がいるか」「行いたい看護ができるか」「教員への相談」のサブカテゴリーから構成された。 ・【将来を見据えた選択基準】のカテゴリーは「将来性」「安定性」「地域貢献」のサブカテゴリーから構成された。
3	上山　他	留め置き法による無記名質問紙調査 対象：看護学科4年次生	職場を決める際の選択要因の質問に対し、「非常にそう思う」と回答した割合は【職場の人間関係】【新人教育・研修の機会】【勤務先の地域性・場所】で60％を超えており、【福利厚生】【関心領域】【給与】が40％を超えていた。
4	山口　他	Webによる無記名式自記式質問紙調査 対象：愛知県内の男子看護学生	就職先選定で重視する項目のうち、【労働安全】【休日・余暇の確保】【福利厚生】【給与】【ワークライフバランス】が「重要である」と70％以上の対象者が回答した。
5	渡邉　他	集合した対象者への自記式質問紙調査 対象：卒業予定の4年生	全体では「病棟や看護職の雰囲気が良い」「インターンシップでの対応が良い」「労働環境が整っている」「病院全体の評判が良い」「希望する領域での看護実践ができる」「実践している看護ケア」が高かった。 『就職先が実習施設である群』と『就職先が実習施設でない群』で比較すると、『就職先が実習施設である群』では「実習先病院で受けた指導」「就職先からの奨学金貸与」「卒業生が多い」が有意に高かった。 『就職先が実習施設でない群』では「交通の利便性が良い」「建物が新しく設備が充実している」「インターンシップでの対応」「病棟、看護職の雰囲気がよい」が有意に高かった。
7	播磨　他	無記名自己記入式質問紙を用いた留め置き法 対象：各学年の実習を終了した後の1～4年生	「就職先を検討する上で優先するもの」について複数回答を求めたところ、対象者全体で「教育体制」が高かった。 1、2年生では「先輩の意見」「保護者の意見」「給料」が高く、3、4年生では「教育体制」「福利厚生」「施設の所在地」が高い。
8	松井　他	半構造的インタビュー 対象：実習先に就職が決定した学生	学生が回答した就職先選択理由は「診療科、病床数が希望に合致している」「実習施設である」「全国に系列病院があり、移動が可能である」「教育制度が充実している」「合同説明会での対応が良かった」「先輩や友人が就職している」「勤務体制が希望と合致している」「寮費が安価である」「利便性がよい」「食堂がある」「将来出身大学の学生を指導することができる」「教員の紹介」「自宅から通える距離である」「給与額が希望と合致している」「公務員である」であった。
9	小薬　他	郵送による自記式質問調査 対象：卒業した4年生（進学者除く）	就職先を決定する際に重視したことは「雰囲気や人間関係がよい」「教育制度（1年目）が充実している」「親・先生・先輩・友人からの勧め」「インターンシップに参加」「福利厚生が充実」の順であった。
10	田邉　他	質問用紙留め置き法 対象：看護学科1～4年生	就労先選択の基準を各学年に質問したところ、次の順であった。 ・1年生は「職場の雰囲気」「場所・地域」「自分のやりたいことができる・できそう」「勤務体制」「給与」 ・2年生は「職場の雰囲気」「場所・地域」「新人教育の充実」「給与」「休暇」 ・3年生は「職場の雰囲気」「場所・地域」「新人教育の充実」 ・4年生は「職場の雰囲気」「場所・地域」「新人教育の充実」
13	村上　他	無記名自記式質問紙調査票（看護師は留め置き法、卒業生は郵送法） 対象：卒業生と在職3年以下の看護師	・就職先の選択理由は「プリセプター制度など新人教育が充実している」「奨学金を受けていたため」「実家から通える施設だった」の順に多かった。 ・また実習施設に就職した群としなかった群を比較すると、就職した群は「奨学金を受けていたため就職が義務付けられていた」「実家から通える施設だった」が有意に高く、しなかった群では「大規模施設だった」「プリセプター制度など新人教育が充実している」が有意に高かった。
14	本多　他	自記式質問紙調査 対象：看護学科4年次生	就職先選定の基準で重視したものの順位は、「院内教育制度」「休日余暇」「子育て支援」が高かった。
15	村松　他	自記式質問調査（Webによる回答も併用） 対象：卒業予定者	・就職で重視した条件は「組織の魅力」「看護職としての魅力」「地理的条件」の順で高かった。 ・就職したくない条件は「人間関係・雰囲気が悪い」「病院の立地条件が悪い」「離職率が高い」「評判が悪い」「給与が安い」「教育制度の不足」「業務の仕方が雑」「病院建築構造・敷地・設備」「組織が嫌い」「福利厚生」「多忙（忙しい）」が挙げられた。
17	出口　他	無記名式質問紙による集合調査 対象：卒業生	就職病院選択動機38項目を2件法で回答を求めたところ「教育・研修システムが充実した病院だったから」「奨学金制度がある病院だったから」「職場の人間関係がよい病院だったから」「看護部長の人柄がよかった病院だったから」「地域に根差している病院だったから」で過半数が「はい」と回答した。
19	山田　他	無記名自記式質問紙による留め置き法 対象：対象病院で実習した3年次生	自由記述で【自宅から近い】が就職先を決定した理由で一番多く、その他同数で【総合病院である】【急性期の経験がしたい】【奨学金関係】が挙がった。

（4）福利厚生・労働環境

就職先選択の条件に就職先の福利厚生や労働環境を挙げている文献は10件であった（文献２～５、７～10、14、15）。

学生は勤務体制や休暇など労働環境が整っているかなど、就職後からの生活への影響を考えて就職先を選択していたほか、将来性や子育て支援、ワークライフバランスなどその施設で長く就業できるかという点も重視していた。

（5）実習やインターンシップでの印象

実習やインターンシップで自分が感じた印象を選択の条件として挙げていた文献は９件であった（文献１～３、５、８～10、15、17）。

学生は実習やインターンシップで感じた人間関係や職場の雰囲気から、働いてみたいと思える職場であるかということを重視しており、加えてそこで受けた指導やモデルとしたい看護職がいるかも条件として挙がっていた。

一方で職場の雰囲気や人間関係の悪さ、看護師の業務の雑さや忙しさなどを目の当たりにした場合には、就職先に選択しない条件として挙げていた。

（6）就職先施設の設備・特性・評判

施設の設備・特性・評判を就職先選択の条件としていたとする文献は６件であった（文献２、５、８、13、15、19）。

看護学生は設備の新しさや規模の大きさを重視しているほか、就職先の評判も重視して選択していた。この他には公務員であることや系列病院があることを条件に挙げていた。

（7）自身の興味・関心

看護学生は実習や学習などで培われた自身の興味・関心から就職先を選んでいたとする文献は６件であった（文献２、３、５、８、10、19）。

自分の興味がある領域や診療科があり、自分の身に着けたい技術や経験ができる病院であることを条件としていた。

（8）その他

その他に看護学生が就職先選択の条件として挙げていたものとして他者の存在を挙げていた文献が５件あり（文献１、２、７～９）、家族や重要他者の近くにいられるように就職先を選択したり、保護者や教員、先輩の勧めで就職先を選択していた。

また実習先に就職した学生では、すでに卒業生が多く就職していることや、将来母校の学生

を指導できることを条件としているものもあった（文献８）。

２）就職先選択に影響したこと

看護学生の就職先選択に影響したことについての内容が含まれている文献は12件で、文献と研究方法・対象、文献中に示された就職先選択に影響したものを表4に示す。

本論文では影響したこととして、実習・講義、インターンシップ・病院見学会、人物、その他に分け、それぞれについて述べる。

表４　就職先選択に影響したこと

文献No.	著者	方法	就職先選択に影響したこと
3	上山　他	留め置き法による無記名質問紙調査 対象：看護学科4年次生	進路選択への影響の質問項目のうち、『非常にそう思う』と回答したものが多かったのは「（実習の中で）患者への看護にやりがいがあった」「インターンシップ」「病院の説明会・見学会」「（実習の中で）モデルとなる看護師に出会った」「（講義の中で）看護の仕事に興味がわいた」順で多かった。 また『やや思う』までを含めた場合は「（実習の中で）患者への看護にやりがいがあった」「（講義の中で）看護の仕事に興味がわいた」「病院の説明会・見学会」「インターンシップ」「（講義の中で）教師の熱意が伝わった」の順に高かった。
5	渡邉　他	集合した対象者への自記式質問紙調査 対象：卒業予定の4年生	就職先決定に影響を受けた人物を複数回答で求めたところ、回答者の多かった順に「ゼミ担当教員」「実習先の指導者・スタッフ」「就職先の看護管理者」「家族」「他の教員」「実習指導教員」「卒業生」「学生課担当者」「その他」であった。
6	竹本　他	無記名自記式質問紙調査 対象：東北地方にあるA大学看護学部1年生	地元志向に関する質問の回答を因子分析した結果、4因子構造が妥当であるとした。 【地元に対する愛着】（東北が好きである、地元が好きである、など） 【地元貢献意識】（東北のために役に立ちたい、地元のために役に立ちたい、など） 【家族とのつながり】（働くようになったら実家から通いたい、長男・長女だから親のそばにいたい、など） 【地元の有利性】（地元で働けば経済的に楽だと思う、地元にいれば将来育児などで親の援助が受けられると思う、など）
8	松井　他	半構造的インタビュー 対象：実習先に就職が決定した学生	実習先を就職先として意識するきっかけとなった看護師の態度についてインタビューしたものをカテゴリー化し、【学生が手本としたい看護実践をしている看護師の姿】【看護師が生き生きと働いている姿】【看護師間の良好な関係が垣間見えるふるまい】【学生の看護実践を支援する姿】【学生をエンパワメントする姿勢】【学生と看護師の距離が縮まるふるまい】【看護師が新人看護師に寄り添って指導している姿】の7つのカテゴリーが抽出された。
9	小薬　他	郵送による自記式質問調査 対象：卒業した4年生（進学者除く）	臨地実習が就職先に選択したかを尋ね、影響したと答えた理由の自由記述カテゴリーに分類したところ、【専門性の深化】【専門性の広がり】【病院環境の現状の体験】【実習での達成感】【役割モデル】【専門分野への気づき】【自己目標の明確化】に分類された。
10	田邉　他	質問用紙留め置き法 対象：看護学科1～4年生	就労先決定に影響したもののうち、講義は学年を経るごとに「影響している」と答えた割合が増えるが「影響していない」「全く影響していない」と回答した割合は1年生で62.5％、2年生で43.5％、3年生で47.5％、4年生で62.5％であった。 また影響を受けた人物については、すべての学年で「自分で決める」と答えた割合が最も高かったが、1年生は「親」、2～4年生は「親」「大学の教員」が次いで高かった。 2～4年生に実習の影響について質問したところ、「かなり影響している」「影響している」と答えた割合は2年生で69.2％、3年生で87.5％、4年生で68.2％であった。
11	中村　他	実習に関するアンケート調査 対象：同じ病院で実習する3機関の看護学生	実習指導方法について（日本版ECTB）実習先への就職の希望の有無で比較したところ、7項目以外で有意な差が認められ、質問項目を因子分析して抽出された「適切な助言・指導」「学生への手本」「受容的な指導態度」「学生能力の引き出し」の4つの因子すべてで有意差が認められた。
12	西村　他	無記名自記式質問紙法 対象：3年課程の看護専門学校4校の在宅看護実習を終えた 3年生	訪問看護への興味は「興味がある」17％、「少し興味がある」58％、「あまり興味がない」11％、「興味がない」4％、「無回答」1％であった。 将来訪問看護ステーション（ST）で働きたいか、については「思う」10％、「少し思う」46％、「あまり思わない」36％、「思わない」8％であった。 また「思う」「少し思う」と答えた学生の訪問看護STへの進路の状況について質問したところ、「新卒の就職は、全く考えたことがない」69.7％、「考えたが、無理だと思ってあきらめた」15.8％と訪問看護STへの就職をあきらめていた学生が多数であった。 「新卒で訪問看護STの就職は可能だと思うか」の質問には「無理だと思う」68.7％、「可能だと思う」31.3％と回答しており、「無理だと思う」と回答した学生にきっかけを尋ねると95.7％が「実習」と回答した。
16	長沼　他	無記名自記式質問紙調査 対象：北海道内の4つの看護系大学4年次生	看護学生の訪問看護への就職希望に関連する要因をロジスティック回帰分析した結果、在宅看護への興味の程度、医療処置の経験を積めること、仕事が難しいイメージ、憧れるイメージが訪問看護への就職希望に関連していた。 すなわち、在宅看護に興味がある人、医療処置の経験が積めることを重視する人、訪問看護に憧れるイメージを持っている人の方が訪問看護をやりたいと思う確率が高く、訪問看護に難しいイメージを持つ人の方が訪問看護をやりたいと思う確率が低かった。
18	本多　他	フォーカスグループインタビューによる質的記述的研究 対象：短大在籍中の3年生でインターンシップに参加した経験を持つ学生13名	インターンシップ参加時に得られた就職先選択に有用だと考えた情報についての語りをカテゴリー化し、【看護の質】【新人受け入れ体制】【人間関係】【労働環境】【看護部の管理体制】の5つのカテゴリーが抽出された。
19	山田　他	無記名自記式質問紙による留め置き法 対象：対象病院で実習した看護専門学校3年次生	「実習病院に就職したいと思った」の項目の回答で、対象者を「就職に影響を及ぼしているか」で2群に分けた。4件法で回答した実習についての質問の点数を比較したところ、「なんでも相談ができた」のみ就職に影響を及ぼしている群の点数が有意に高かった。 その他有意差は無かったが、就職に影響を及ぼしている群の点数が高かった。 ・『実習指導者の学生への対応』:「学生の話を聞いてくれた」「指導者と関わる時間が多かった」 ・『実習指導者と他スタッフとの関係性』:「コミュニケーションがとれていた」「業務が円滑にできていた」「経験の浅いNsも楽しそうに働いていた」「新人教育（研修）に参加できた」 ・『実習指導者の看護ケアと患者への対応』「患者の依頼に適切に対応」「患者との信頼関係を構築」「患者への言葉遣いが良い」「安定した技術」「根拠に基づいたケアの提供」
20	山本　他	無記名自記式質問調査 対象：卒業予定の短期大学看護学科の3年生	質問項目をクロス集計後カイ二乗検定し、以下の点で有意差を認めた。 ・奨学金は病院からもらっている学生が多い。 ・自治体の奨学金をもらった学生は就職の範囲に直接影響があった。 ・病院の奨学金は、経済的な理由でもらっていることが多い。 ・病院で奨学金をもらった学生は、就職に有利と考えてもらっている学生が多い。 ・日本学生支援機構の奨学金をもらった者は1年次前期からもらったものが多い。 ・奨学金を経済的理由で理由した者は就職を給与で決めている者が多い。

（1）実習・講義

就職先選択に実習・講義が影響しているとした文献は9件であった（文献3、5、8～12、16、19）。

実習では学生が実践を通じて自身のやりたい看護が明確になるほか、「こんな看護師になりたい」と思えるモデルとなる看護師を見つけ「自分がなりたい看護師像」を得ることで、自分の働きたい領域や専門性への関心につながっていた。

一方で実習指導者やスタッフが看護学生や患者、他のスタッフ（新人看護師）へどのように対応しているかが、実習施設を就職先として考えるかということに影響を及ぼしていた。

また在宅看護の領域では訪問看護実習での看護師の姿は在宅看護への関心を高めるものの、看護学生は求められる実践能力の高さを感じ、新卒での就職先として訪問看護を避けることにつながっていた。

(2) インターンシップ・病院見学会

インターンシップや病院見学会が就職先選択に影響しているとした文献は3件であった（文献3、5、18）。

インターンシップや病院見学会自体が影響していることに加え、そこで看護管理者から話を聞くことも影響していた。また複数施設でインターンシップに参加した学生は、患者への対応や提供される看護技術で施設毎の看護の質を比較しているほか、スタッフや新人看護師の働いている姿から、この職場に就職した場合に自分がどのように受け入れられ、どのように働くのかをイメージしていた。

(3) 人物

就職先選択に影響したことに人物を挙げていた文献は2件であった（文献5、10）。

影響を与えた人物は家族（親）やゼミ・実習などの教員のほか、卒業生と回答していた。

(4) その他

就職先選択に影響したこととして地元の存在が挙げられており、住み慣れた地元への愛着や繋がりを保ち続けたいという思い、就職後も継続的に働けるという考えが影響していた（文献6）。

また奨学金の貸与が就職先選択の範囲に影響していたり、経済的理由で貸与を受けた学生は給与で就職先を選択している者が多いなど、経済的側面が就職先の選択に影響を及ぼしていた（文献20）。

Ⅳ．考察

看護学生の就職先選択に関する文献から、看護学生が就職先を選択する際の条件や重視することと、就職先の選択に影響することに分け、それぞれについて分類し、その内容を示した。

ここからはそれらの条件や影響が、看護学生の就職先選択をどのように決定づけているかを考察し、新卒看護師の就業継続の支援と離職率の低減に向けた取り組みについて検討していく。

１）働く看護師から働く自分をイメージする

看護学生は実習やインターンシップを通じて自分で見聞きしたことや感じた印象を就職先選択の条件や参考にしていた。特に職場の雰囲気や人間関係を重視し、看護学生への指導や対応の仕方も大きく影響していた。

実習やインターンシップについては就職先選択の条件より影響についての記述が多く、インターンシップでの看護師の対応によって学生は「この施設で働きたい」という思いになっていた。実習ではその傾向が強く、実習先に就職した学生や就職したいと考える学生を対象とした文献では、ロールモデルとしたい看護師との出会いや、学生が実習での実践で看護師の支援を受けたこと、看護師にエンパワメントされたと感じた体験によって、学生は実習施設を就職先として強く意識していた。また学生は実習中に看護師との距離が縮まり相談ができたこと、新人看護師への指導の場面を見たことをきっかけとしても、実習先を就職先として意識するようになっていた。看護学生はこれらの体験を通じて、自身も患者へのケアに取り組む看護チームの一員であると感じ、そのチームの中で自分も先輩看護師からこんな指導を受けられるというように、「就業して看護師として働く自分」を強くイメージできることが就職先の選択につながっていた。

一方で実習では看護学生はインターンシップに比べて長期間施設内で過ごし、実際に働く看護師の姿をそれだけ長く見ることになる。実習中に看護師の多忙である様子や雰囲気の悪さなどを感じると、インターンシップで感じた場合以上に実習先を就職先として回避することも考えられる。看護学生が就職先を選ぶ際に、「なぜその施設を選んだか」と同じように「なぜその施設を選ばなかったか」という視点でも考えさせることで、一つの体験や印象だけでなく多面的に考えて就職先を選択することに繋げることができ、短期間での離職の防止につながる可能性がある。

また実習で看護師の優れた実践を体験することが、かえって就職先としての選択につながらない場合があることも明らかにされていた。本研究で分析対象となった文献のうち、訪問看護への就職について学生に尋ねた2つの文献では、看護学生は訪問看護への関心やあこがれを感じつつも、新卒での就職は難しいと考えていた。西村ら[7]は、学生は訪問看護実習を通じてじっくり患者に向き合いたいという希望を抱きながらも、１人で訪問し看護を展開しなければ

ならない実際を目の当たりにして、自分には無理だと諦めてしまっていると述べている。これは訪問看護実習のみならず､実習で救急看護や手術看護､専門看護師や認定看護師などスペシャリストによる看護実践など専門性の高い看護を目にした時も同様に憧れと諦めという反応が起こっていることが考えられる。このような学生の反応に対しては、実習中に看護学生が体験や見学した臨床看護師の看護実践について、その実践の卓越性を示すだけではなく、学生に「その実践には今学んでいることが土台になっている」ことを想起させたり、可能であればその実践の一部に加わることで、学生の諦めを防いで関心のある領域の実践ができる就職先を選択することにつながると考えられる。

以上より、実習やインターンシップは「働く看護師としての自分」をイメージさせることで就職先の選択に影響を与えていることが示されていた。しかし、そこで描かれたイメージは学生の視点で見た一側面であるため、教員や看護師が学生とともにその体験を捉え直すことで学生が本当に関心のある領域の就職先を選択することにつながり、早期離職することなく看護師として働いていくことにつながると考えられる。

2）就業する地域の選択

就職先選択の条件として、就職先施設がある地域についての記述が多くあり、大きく地元など土地勘があり愛着を感じる地域とそれ以外の地域に分けられた。

地元など愛着を感じる地域を選択する場合では、地域への貢献や就職先が地域に根差した医療を行っていることが選択の理由となっており、自身や家族など周囲の人々にとって馴染みがある施設で働きたいという考えが就職先の選択に影響を与えていると考えられる。また就職先が実家に近いことや実家から通えることを条件としていることもある。これは家族とのつながりで就職してからのサポートを受けられるというだけでなく、後述するように経済的側面の影響もあると思われる。

一方で地元以外の地域を就職先に選択する理由については、今回分析対象とした文献には詳細な記述はされていなかった。しかし、村上ら[8)]の看護学生を含む保健医療福祉職を学ぶ学生にインタビューを行った研究では、「地元に残るのは負け」「日本のトップに行きたい」「県外でチャレンジしたい」といった語りが見られ、この語りと同様の理由ではないかと推察される。これらは都市部より地方の学生には一定程度見られる動機と考えられる。地元を離れることは看護師としてのキャリアアップにつながる面がある一方で、漠然とした憧れのような感情で就業する地域を選ぶことは必ずしも良いとは言いがたい面があると考える。新卒看護師が就業した後にリアリティショックに直面し、自身の存在意義が揺らぐことがあることはすでに広く知られているが、地元には家族などがおり、新人看護師を支える存在を得やすいということも考慮して学生が就職先を選択できれば新卒看護師の離職率低下につながると考えられる。

3）看護学生が就職する職場に期待すること

看護学生は就職先を選択する際に条件として、教育体制（特に新人教育）と労働環境や休日などの福利厚生が充実していることを挙げていた。

村松ら[9]の看護学生が就職前に直面する不安についての研究では、「技術経験不足」と「知識不足」に強く不安を感じていることが明らかにされている。看護学生は実習や国家試験の学習などを通じて自身の知識・技術不足を強く感じることになるため、就職してからも自分を育ててくれる体制や学習の機会が設けられていることを強く望んでいると考えられる。一方でこれらのことを強く希望しているということは、就職後の技術習得や学習に対してやや受動的であるとも言える。看護職の倫理綱領では個人の責任として継続学習に努めることを挙げており[10]、その点では専門職としての看護師像とは差異がある。看護学生を受け入れる施設側はこの看護学生のニーズを満たす体制を構築するとともに、看護学生を送り出す養成機関側も看護職としてのキャリア教育の中で看護職としての学習への臨み方を身につけるような指導が必要だと考えられる。

以上のことは学生自身が就職してからの自分をどのように想像しているかを推測すれば理解できるが、今回分析対象となった文献では休暇や勤務体制など福利厚生が就職先選択の条件として挙げている文献が多かった。看護学生が福利厚生を就職先選択の条件や重視することに挙げることに対して、そのようなことだけを重視する可能性について言及している文献もあったが[9]、学生の挙げている条件の中には「ワークライフバランス」や「子育て支援」なども見られた。これは看護職としてこの職場で長く働きたい、専門職として継続的なキャリア形成をしていきたいという看護学生のニーズがあると考えられる。看護学生が研修の多さや休暇の多さなどの一側面だけで就職先を選ぶことは芳しくないが、専門職としてどのような知識や技術を身に着けたいのか、どのようなキャリア形成をしていきたいのかなども含めて就職先を考える指導やサポートが必要と思われる。

4）経済面が就職先選択へ及ぼす影響

本研究で分析対象とした文献中で、看護学生が就職先を選択する際に給与など経済的条件を挙げているとした文献が多かった。給与は求人情報などでも勤務時間や休暇とともに大きく示されていることが多く、初めて社会に出る学生にとって大きな関心事であることは理解できる。一方で奨学金の貸与が看護学生の就職先選択に影響を与えていることが明らかにされていた。

看護師になるための養成機関には大学や短期大学、専門学校、看護高等学校と複数の選択肢があるほか、国公私立の違いもあるため一概には言えないが、私立大学での比較でみると看護学科の学費は文系学部に比べ学費は高い傾向にあり[11]、看護師になることを目標に進学しても

経済的な困難さを抱える学生がいることが推測される。そのような看護学生が就学を継続する手段として奨学金を受けることは有効だと考えられ、特に看護学生に一定期間の勤務を条件に返還を免除する奨学金を設けている病院や自治体なども多く、奨学金を受けられる機会が他の進路を志望する学生に比べ多いと推測できる。一方で十分に就職先として検討をしないまま金額の多寡で施設からの奨学金を受けた場合、その施設の特性と学生が学習の過程で抱いた興味や関心に乖離が見られる可能性があり、山本[12] は実際に奨学金の金額に惹かれて契約した学生が就職後に後悔するケースが多いと述べている。この場合は実際に臨床に立った後の困難感が増し、早期離職へとつながることが推測される。奨学金は就学を継続する手段として有効であると同時に進路の選択に大きく影響を及ぼすことを学生に周知することは、学生の早期離職の防止だけでなく継続的なキャリア形成に有効だと考えられる。

５）新卒看護師の就業継続の支援のあり方と離職率低減に向けた取り組みについて

看護学生の就職先選択への影響や条件から、新卒看護師の就業継続の支援と離職率低減に向けた取り組みについて考えていく。

看護学生は実習やインターンシップを通じてその施設の雰囲気を感じ、また職員と直接触れ合うことで「自分はこの施設で本当に働けるのだろうか」ということを見極めている。ここで看護学生が問う「働けるかどうか」には２つの視点があると考えられ、一つは「この施設での実践のレベルについていけるか」ということ、もう一つは「この施設で看護師を続けていけるかどうか」ということであろう。

「この施設での実践のレベルについていけるか」という視点では、看護学生が自分の関心のある分野で先駆的な治療や看護を実践している施設に就職を考えた時に、憧れはあるが自分に実践できるだろうか、という不安を抱くことは推察できる。そのため学生は教育体制が充実し、質問ができたり指導をしてもらえる雰囲気の良さを重視し、この施設に就職すれば自分の望む高いレベルの実践ができるように導いてもらえると考えているのだろう。しかし看護職として高いレベルの実践をしていくためには、自ら技術や知識を研鑽していく必要がある。働く中で自ら学ぶ必要性に気づき変化できない場合、新卒看護師は「この施設ではなりたい自分になれない、やりたい実践ができない」と思い、離職を選択するという行動につながると考えられる。

次に「この施設で看護師を続けていけるかどうか」について考えると、看護学生は実習では１人の患者を受け持ち、看護展開をすることを繰り返している。しかし、看護職として臨床に出ると複数の患者や業務を行う多重課題に直面し、その中で強い困難感を抱くことになる[13]。看護学生は実習やインターンシップなどで多忙に働く看護職の実際を目の当たりにし、看護職として仕事をすること自体に不安になることは推察できる。そのためわからないことや困っていることがすぐに相談できる雰囲気であるかを重視し、実習やインターンシップで新人看護師

への指導の様子や看護職を含む施設内の人間関係を注視している。またワークライフバランスなど福利厚生への関心の高さは、長くこの施設で働けるよう制度などが整えられている施設は職員を大切にしている組織だと捉えていると考えられる。その他に仕事を始めることで大変になる自分の生活を考え、サポートをしてくれる家族と距離が近いことや、頑張ることへの対価として給与の良い施設であることを条件とするのだろう。

これらを条件として就職先を選択する看護学生の心情は理解できる。また就職情報サイトやSNSなどの普及により施設の様子や雇用条件についての情報が容易に取得できるようになり、施設から提示される条件の比較検討をして希望する条件に近い施設を見つけやすくなったことは、看護学生にとって望ましいことであろう。しかし、学生はこれらの情報を多面的に活用できているかという点では疑問がある。多くの情報があっても十分吟味できず、給与の多さや施設の知名度、自分が見聞きした、あるいはSNSなどで見た雰囲気や評判など、ある一面だけで決めてしまう場合もあると考えられる。そのような場合には「自分には合わない」と感じる頻度が多くなり、早期離職にもつながっていくだろう。

以上より、新人看護師が就業を継続するためには就職先を選択する学生の段階で将来の自分を描けるよう指導や対話を行うとともに、その自分になるためにどのようにキャリアを積む必要があるかを考えて就職先に関する情報を多角的に見つめるための支援が必要であると示唆された。また施設側について考えると、看護学生は働きやすい労働環境や、スタッフ間の相談できる関係性や良い雰囲気を就職先選択の条件として重視している。このような職場環境は就職先選択の条件としてだけでなく、今働いているすべての看護師にも働きやすい環境だと言え、そこで働く看護師を見て、さらに学生が働きたいと感じる好循環が生まれる。そのような環境を整えるために業務の多忙さなどを改善できる体制づくりが必要であることが示唆された。

６）今後の課題

本研究では看護学生が就職先に求める条件などについて文献検討を行ったが、受け入れる施設側についても、看護学生の就職先選択をどのように捉えているか、施設が発信する情報にはどんな内容が必要と考えているかを明らかにすることが必要である。また就職をした看護師が実際に働き始めた後に自分の重視した条件についてどう考えているか、振り返ってどんな情報が必要だったかと感じているかなど、就職した後で就職先選択の条件をどのように捉えているかを明らかにする必要がある。両者を明らかにして、看護学生が求める条件と施設が発信する情報の不一致を減らすことが新卒看護師の就業継続のために重要だと考えられる。

Ⅴ．結論

看護学生の就職先選択に関する研究からその条件や影響を与えたものについて検討し、以下のことが明らかとなった。

・看護学生は就職先選択の条件や重視したこととして、就職先施設の地域、経済的理由、教育体制、福利厚生・労働環境、実習やインターンシップでの印象、就職先施設の設備・特性・評判、自身の興味や関心などを挙げていた。

・看護学生の就職先選択に影響を与えたものとして、実習・講義、インターンシップ・病院見学会、人物などが挙がっていた。

引用文献

1）日本看護協会：日本看護協会調査研究報告＜No.96＞2021　2020年病院看護実態調査報告書.＜https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/96.pdf＞,〔2021年5月10日〕

2）山住康江，北川明，安酸史子：就職6か月目の新人看護師の離職願望に影響する要因に関する研究，共立女子大学看護学雑誌，4巻，9-17，2017.

3）竹内久美子，杉山由香里：新卒看護師の入職後1年間の心理的状況の変化について　自己効力感・離転職意思・精神的健康度の縦断的調査，目白大学健康科学研究，4号，29-36，2011.

4）渡邊里香，荒木田美香子，鈴木純恵：若手看護師の離職意向に関連する個人要因と組織要因の検討　1年目と5年目の比較，日本看護科学会誌，30巻1号，52-61，2010.

5）山田美幸，前田ひとみ，津田紀子　ほか：新卒看護師の離職防止に向けた支援の検討　就職3か月の悩みと6か月の困ったことの分析，南九州看護研究誌，6巻1号，47-54，2008.

6）山崎由実，川島和代，諸江由紀子　ほか：石川県における新卒看護職員および離職への意識に関する実態，石川看護雑誌，5巻，109-118，2008.

7）西村和子，勝眞久美子：新卒看護師の訪問看護ステーションへの就職を阻む要因，日本看護学会論文集：在宅看護，47号，39-42，2017.

8）村上眞須美，小林昭子，廣森直子　ほか：A大学学生の就職先決定に影響を及ぼした要因と就職支援の課題，日本ヒューマンケア科学会誌，11巻1号，18-27，2018.

9）村松十和，五十嵐慎治，鈴木ひろ子　ほか：看護学生の就職先選択要因及び就職前に直面する不安，豊橋創造大学紀要，20号，25-33，2016.

10）日本看護協会：看護職の倫理綱領.＜https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf＞,〔2021年7月5日〕

11）文部科学省：令和元年度　私立大学等入学者に係る初年度学生納付金平均額（定員1人当たり）の調査結果について.＜https://www.mext.go.jp/content/20201225-mxt_sigakujo-000011866_1.pdf＞,〔2021年7月5日〕

12）山本江里子：看護短大における就職支援について考える，神奈川歯科大学短期大学部紀要，2号，85-89，2015.

13）今井多樹子，岡田麻里，高橋美由紀：新人看護師が複数の患者を同時に受け持つ体制下で直面する多重課題対応不全を生み出す因子　KJ法を活用した新人看護師の面接内容の構造化から，質的心理学研究，19号，141-157，2020.